久保田長太郎（くぼたちょうたろう）

クボチョウと慕われた鋳物の神様

－鋳造用砂型造型機の開発－

久保田長太郎（1882 ～ 1964）
出典：『新東工業三十年の歩み』

■発明王豊田佐吉の知遇を得て奮起

鋳造機械メーカーとして知られる現・新東工業（株）の創始者久保田長太郎は、1882（明治15）年、大阪に生まれた。14歳の時に鋳物工となったが、日露戦争で従軍し、巡洋艦吾妻（あずま）乗り組んで奮戦した。

復員後、長太郎は1909（明治42）年に豊田織機（株）に入社した。ここで、豊田佐吉に出会い、その鋳物工としての優れた腕を見込まれて引き立てられた。佐吉の意を体して、紡織機の鋳物部品の製造に腕を奮った。1913（大正2）年には、同社鋳造部門の責任者となっている。長太郎の話によれば、佐吉から鋳造技術に関する諸処の注意やヒントが与えられ、これに大いに奮起したという。1920年頃には、当時、手作業一本の鋳物工場の機械化について佐吉は長太郎に説いたという。

長太郎は、1923年に名古屋市西区児玉町に久保田鋳造所を発足させた。この時は、豊田織機には在職したままであった。当時は、第一次大戦後の緊縮財政の下での不況に、さらに関東大震災が起こり、深刻な不況時代で、経営は必ずしも容易ではなかった。しかしながら久保田鋳造所の鋳物は、鋳肌（いはだ）（鋳物の表面）が美しく、他の鋳物工場ではまねのできない高品質のものであった。苦しい中にも名声を高めたのは、鋳物砂を処理するサンドブラストやタンブラーなど他に類例のない機械設備をもった鋳物工場であったからである。経済不況のどん底の中、久保田鋳造所は機械工業へも進出して躍進を続け、1933年、合名会社久保田鋳造所に改組した。

国産初のC11型生型造型機（1927年）
新東工業（株）豊川製作所蔵
この造型機は、2017年に日本機械学会の「機械遺産」に認定された。

■国産初の生型（なまがた）造型機（モールディングマシン）の開発

豊田佐吉は1926（大正15）年に（株）豊田自動織機製作所を設立した。その本社工場を刈谷に建設する際に、「久保田君が前に言っていた機械化した斬新な鋳物工場をつくるから、存分に腕をふるってくれ」と、鋳物工場建設の一切を久保田長太郎に任せた。長太郎は佐吉の命を受けて、精魂を傾けてその実現に努力し、1927（昭和2）年、刈谷に画期的な鋳物工場を完成させた。この時、米国のオスボーン社から豊田自動織機製作所に輸入されたモールディングマシン5台うち、1台を久保田鋳造所が買い取った。それを分解・組立して研究を積み重ね、改良を加えて完成したのが、1927年に完成した国産初のC11型生型（砂型）造型機である。鋳型を熟練工の技によらず、高速で生産する生型造型機（ジョルト・スクイーズ・モールディング・マシン）は鋳造工場機械化の核となる機械であった。

自動車鋳物（株）に納入された総合プラント設備第１号
出典：『新東工業三十年の歩み』

久保田鋳造所は、1934年に（株）久保田製作所と改組し、鋳造機械の総合専業メーカーとなった。第二次世界大戦で、本社と本社工場を空襲で全焼し、壊滅的な打撃を受けたが、1945年にGHQより民需品生産転換の許可を得て、鋳造機械生産は再開された。

1951年には、自動車鋳物（現・IJTテクノロジーホールディングス）に鋳造の総合プラント設備第1号を納めている。1960年に社名を新東工業（株）に変更し、現在に至る。

（石田正治）